



10月1日みあれ祭(海上神幸)



晩秋の候 宗像大社御崇敬者の皆様には愈々御清祥の段、慶賀に存じ上げます。

この度、お手元にお届きの通り、社報「宗像」が一新致しました。「宗像」は明治二十四年に、宗像在住者が他郷で活躍する宗像出身者へ送る機関紙として創刊され、宗像大社の祭事や郷土の景状、知人の消息などが主でありました。

その後戦争によって休刊していたものを、昭和三十四年六月の皇太子殿下(今上陛下)御成婚奉祝の記念事業の一環として、同三十六年一月一日宗像大社社報「宗像」として復刊致しました。復刊第一号の論説で、当時の久保宮司は「先代宗像誌の例に倣って、宗像大社の現況或いは神社の由緒を宣揚することのみを目標とするものではなく、先輩方の綴られた先代宗像誌の精神を受け継いで、郷土愛と互助の意義を生命としてゆきたい。」と述べており、現在は、地元宗像の氏子・崇敬者、東京・埼玉を中心とした全国各地の宗像会の皆様、また遠くはブラジル・ハ

御挨拶

11月祭事暦

- 毎月1・15日 月次祭
午前10時 高宮祭
第二宮・第三宮祭
午前11時 総社祭
- 11月3日 午前11時 明治祭
- 11月15日 午前11時 七五三祭
- 11月23日 午前11時 新嘗祭

ワイなど海外の宗像出身者の皆様にも送付申し上げておりますが御高齡となられ、現在では次世代三世代の方々が読者となっております。

昨年八月号で五〇〇号を迎えましたが、御高齡の氏子・崇敬者にも見やすいカラー化、保管しやすくするための紙面のコンパクト化などご意見を種々頂戴し、この度一新致しました。

今後も全国、海外の宗像出身者、崇敬者に、神郡宗像の四季折々の香りをお届けし、地元宗像の氏子各位へ諸行事の通知・案内も含めて発信致します。

大社側も現在は若い神職が増え、社報に限らず諸々の社務において伝統の護持と更なる躍進に若い力が満ち溢れております。何卒温かい目で御見護りいただきませう、お願い申し上げます。

宗像大社 宮司 神島 定



今月の「宗像」より紙面を一新し、皆様のお手許にお届けすることとなった。社報発刊の経緯は、宮司挨拶の通りであるが、一〇〇年以上の歴史を有する郷土の便りは、宗像を離れた人々にとっては、郷愁を誘う存在であるらしい。まさに「ふるさと」は遠くにおいて思ふものなのか。

今月初旬、女優浅野温子さんによる語り舞台「日本神話への誘い」の公演が、伊勢の神宮と出雲大社にて行われた。混沌の世情が日増しに強まる現在、神話の世界を語り継ぐことこそ、日本国再生の大きな原動力であると企画された。

公演に参加し子供の頃が鮮やかに蘇ってきた。当時は絵本、童話などまだまだ神話の世界に触れる機会が多かった。ところがいつの間にか「日本神話」の言葉と共に目や耳にすることが無くなった。世界の中で国の起源を語る神話を否定する国などあるだろうか。誠に嘆かわしいことである。

約一世紀の宗像を時代とともに歩んできた「宗像」神話の復活と日本国の再生。「温故知新」ではないが、ほんの半世紀前の郷土や我が国から学ぶことも沢山あるような気がする。



神具・装束 結婚式場洋品

福岡店 〒812-0045福岡市博多区東公園2-31
電話 福岡(092)651-9456番

株式会社 井筒

本店 〒600-8231京都市下京区油小路六条北入
電話 (075)341-3341(代)~4番
(075)343-3341番

木組の家 匠の技

総合建築業 株式会社 弘江組

〒811-3406福岡県宗像市稲元1025 電話(0940)32-2567



秋季大祭斎行

秋季大祭田島放生会は三日間とも天候に恵まれ、平日にも関わらず連日多くの参拝者で賑わいました。特に夕刻からは、仕事を終えた家族連れ、学校帰りの学生などで大駐車場は満車状態。三日間で約十五万人の参拝者が訪れました。

○九月三十一日 宵宮祭

全神職参籠し、夕刻午後六時より宵宮祭を斎行。夕暮れの中、いよいよ始まる当大社最大祭事秋季大祭前の静けさに包まれた。



みあれ祭当日の朝日(大島・中津宮神門より)

○十月一日 海上神幸「みあれ祭」

快晴で迎えた「みあれ祭」当日。眩しいほどの朝日が差し込む。午前八時三〇分中津宮(大島)で、大島・鐘崎の神輿奉仕者や、漁業関係者、多くの参拝者が参列し、出御祭が斎行された終了後、大島小学校鼓笛隊を先頭に沖・中両宮の御神璽を奉戴した神輿が大島港に到着。港の内外には宗像七浦から参集した漁船約四〇〇隻が、一波切り御幣「紅白の吹流し」「大漁旗」で飾り、待機していた。

午前九時三〇分、沖・中両宮の神輿が御座船に遷されると、合図の花火が打ち上げられ出港。二隻の先導船を先頭に、二隻の御座船お供する供奉船、その数およそ四〇〇隻の大船団は幾筋もの航跡を残しながら、穏やかな海上を進んだ。



入御される三宮の御神璽

だ。

一方その頃、田島の辺津宮でも午前九時に出御祭が斎行され、辺津宮御神璽が沖・中両宮の御神璽の到着する神湊港へと出御された。大船団は秋晴れの爽やかな空の下を順調に海上神幸。空には取材のヘリコプター三機が舞う中、大

船団は、波風のない玄界灘を順行した。神湊港入港間近になると、供奉してきた船団は、順次御座船を一周し各港へと帰っていった。午前十時三〇分予定通り沖・中両宮の御座船は神湊港に無事到着。みあれ祭は滞りなく終了した。

●中津宮御座船

蛭子丸・宗像漁協(七・三ト)
船長 福崎 浩志氏

● 随伴船

第二宮一丸・宗像漁協(八ト)
船長 藤島 誠治氏

● 先導船

幸丸・宗像漁協(六・六ト)
船長 川西 勝利氏

● 沖津宮御座船

共進丸・鐘崎漁協(十五ト)
船長 宗岡 讓氏

● 先導船

朝日丸・宗像漁協(七・三ト)
船長 川口 明氏

○陸上神幸

一年ぶりにお揃いになられた宗像三女神は、玄海魚市場でお祓いの後、若い男衆に担がれ神湊の高台にある「頓宮(御旅所)まで陸上神幸。頓宮祭を斎行し、御座船奉仕者には神島宮司より感謝状と記念品が贈呈された。

その後三宮の御神璽を乗せた三台の御座車は、宗像警察署の白バイ・パトカー、宗像交通安全協会広報車、消防自動車に先導されて辺津宮まで陸上神幸し、正午前無事に辺津宮本殿に入御された。



みあれ祭後、頓宮へ向かう御神輿

●御座車

株式会社新出光
西久大運輸倉庫株式会社
宗像地区タクシー協会
(みなとタクシー株式会社)

●先導車

国民宿舎ひびき
宗像地区交通安全協会
宗像市消防団第八分団
宗像市消防団第十一分団
玄海ホテル旅館組合

●供奉車

宗像市消防団第十一分団
玄海ホテル旅館組合

○一日祭(入御祭)

「主基地方風俗舞」

辺津宮に入御されて直ちに一日祭を斎行。保存会々員の奉仕で主基地方風俗舞が奉納された。

正式には「大嘗祭主基地方風俗舞」と呼ぶ。「大嘗祭」とは歴代天皇が御即位される一世一代の最重要祭儀。「主基地方」とは、この大嘗祭に際し奉献する新穀をつくるための齋田を、京都を中心に東方「悠紀地方」、西方「主基地方」から選定された。

昭和天皇御即位の昭和三年、福岡県早良郡脇山村(現福岡市早良区脇山)が主基齋田とされた。その時たった一度だけ舞われたのが、この主基地方風俗舞である。しかも門外不出を原則とし、大嘗祭が終わった後は一度たりとも奏されることはなかった。しかし脇山村の産土神が「横山神社」という当大社の分祀社であった関係上、この記念すべき神

樂舞を後世に伝えるべく、特別の思し召しを以って宮内省より、当大社に御下賜いただいた。

ちなみに今上陛下の大嘗祭では大分県が主基地方に選定され、やはり主基地方風俗舞が奉納されたが、全国で唯一伝承保存されているのは当大社のみである。

一日祭で御奉仕いただいた保存会の皆様は次の通りです。(敬称略)

〔舞方〕

- 吉武 倫彦 石津 典秀
- 中野 武和 中野 修
- 清水 陽介 中野 正徳
- 深田 龍介 吉田 敏幸
- 中山 真清
- 永島 卓爾

〔歌方〕



主基地方風俗舞

みあれ祭

みあれ祭は毎年十月一日、宗像大社秋季大祭田島放生会(の)の幕開けを飾る前儀として、事前に中津宮(大島)にお迎えした沖津宮御神輿(沖ノ島)と中津宮御神輿をお乗せした御座船二隻に、宗像七浦の漁船約四〇〇隻が船団を組んでお供し、大島港(大島村)から神湊港(宗像市)までの玄界灘を、約一時間かけて巡行する海上神幸。

神湊港に到着された沖津宮・中津宮の御神輿を、辺津宮(宗像市田島)御神輿がお出迎えし、年に一度宗像三女神は再会する。そして神宮まで陸上神幸し、三日間に亘る秋季大祭が幕を明ける。

このみあれ祭は、

中世に行われていた長手神事を昭和三十七年に再興したもので、往時は辺津宮(宗像市)と、政所神社(現在は辺津宮境内社)と、その本宮である沖津宮(沖ノ島)間で、春夏秋冬の年四回行われていた。これが江戸期には年二回に変更され、現在は年一回となっている。



この神事を「みあれ祭」と称するのは、「神の御生れ」即ち宗像大神の御神威の一層の発揚を祈求することによる。

神社の御祭神は火や水に例えられるが、この「みあれ祭」においては、玄界灘を渡り市杵島姫神(辺津宮)のもとへ、田心姫神(沖津宮)、湊津姫神(中津宮)の御神輿をお迎えはしても、秋季大祭終了後、沖ノ島・大島とそれぞれの主祀場へお遷しする神事を行わないというのは、宗像三宮の総社としての辺津宮に、宗像三神の御神威は水のように増していくことである。



流鏝馬神事

○十月二日

「流鏝馬神事」

南北朝時代の正平年間よりの歴史をもつ流鏝馬神事が、二日目の朝午前八時より宮木貞彦氏らにより奉納された。

射手は烏帽子と直垂姿に威儀を正し、本殿の命名式の後、神馬と共にお祓いを受け、神門前に設けられた馬場道を三頭が疾走。地上七メートルの的に向けて次々と矢を射ると、拝観者から盛んに拍手が起こっていた。

その年の豊作を占うと共に、矢は災難消除のお守りになるといわれている。御奉仕いただいた射手の方は次

の通り。(敬称略)

- 宮木 光広
- 宮木 敏己
- 木稻 修一

二日祭

「翁舞」

二日祭では福岡市の喜多流(梅津忠弘氏門下) 社中の奉仕により、能管や鼓の鳴り物に合わせ「翁舞」が神前に奉納された。この舞は古くから延命招福の御利益が有名で、一目見ようと詰めかけた多くの参拝者は、風雅な舞にしばし見入っていた。

この時につけられる室町時代作の「翁面」は沈鐘伝説をもつ。今から約五〇〇年前の明応八年(一四



2日祭で氏子奉幣使を御奉仕された城野寅夫氏(福岡町)



翁舞

○十月三日

三日祭

「浦安舞」

大祭三日祭では地元玄海中学校二年生の女生徒四名による奉仕で、浦安舞が奉納された。

九九、時の大宮司宗像興氏が、鐘の岬(現II玄海町鐘崎)の海中に沈んでいる大鐘を引き揚げようとする、突然大時化となり引き揚げを断念した。すると海は忽ち鏡のように穏やかになり、そのしずかな海面に翁の面が浮かびあがったという。この面を龍神から授かったものと、当大社の本殿に奉安し、以来神宝とされている。



浦安舞

緊張した面持ちで十二単を着装し、檜扇と鈴を手に舞う姿は、拝殿に詰めかけた多くの参拝者を魅了した。

浦安舞は昭和天皇の御製を皇紀二六〇〇年(昭和十五年) 奉祝の際、祭祀舞として制定され、以来全国津々浦々の神社で舞われている。当大社においては小・中祭では巫女が、春秋大祭時では地元出身の女子に奉納いただいている。

- 木藤 千晶(玄海中学校二年)
- 花田 聡子()
- 鎌瀬 芽衣()
- 鎌瀬 麻衣()

第三十三回西日本菊花大会開幕

神郡宗像に菊の季節が到来しました。九州各県を中心に、全国の菊花愛好家が丹精込めて作り上げた銘花約三千五百鉢が、境内の特設会場に展示されます。この大会の最高賞は内閣総理大臣賞、この他に大臣賞が十一本授与され、別名「菊作り九州ナンバーワン決戦大会」とも呼ばれています。

期間中の境内は、観菊者、七五三の家族連れなどで賑います。また菊苗・菊鉢の販売、地元玄海の海の幸、抹茶コーナー、参拝記念品が当たる「菊みくじ」などの楽しい催しも行われています。是非、御参拝下さいますよう御



案内申し上げます

期間 十一月一日～二十三日
時間 終日
(夜間は照明をあてております)

会場 宗像大社境内
表彰式 十一月一六日
午前十時

於IIアクシス玄海

拝観料 無料
駐車場 無料



昨年の内閣総理大臣賞 菊



七五三祭のお知らせ

今年も七五三のシーズンがやって参りました。

このお祭りは、数え年で三歳の男、女児が、ご両親やおじいさん、おばあさんに連れられて、氏神さまに生を受けてから今日まで無事に成長できたことを感謝し、将来の御加護を祈願する人生儀礼です。

三歳は男女ですが、五歳は男児、七歳は女児というのは、子育てをされた方はお分かりと存じますが、男児の方が女児に比べて病気をしやすく、体が弱いためといわれております。いづれにせよ心身ともに成長過程にある幼児が立派に児童となるように営まれてきた、我が国独特の習慣です。

十一月十五日に行うのは、犬公方といわれた五代將軍徳川綱吉の子徳松が、十一月十五日に祝儀を行ったことに由来しています。ちなみに現代では、十一



月中の土・日曜日に、多くの七五三祈願者が訪れます。

当大社では、十月末から十一月いっぱい、七五三の御祈願をお受けしております。

お子さまの情緒の芽生える最も重要な時期のお祭です。是非御参拝下さいますよう御案内申し上げます。

期間 十月末～十一月末まで

時間 午前八時三〇分～午後六時三〇分

無休

初穂料 一人113,000円

一名増すと22,000円の追加

授与品 御守、千歳飴、御幣などを授与致します。

「沖ノ島物語『海の正倉院』」閉幕

延べ三二、六四五人来館

世界遺産へ向け 確かな一歩

当大社神宝館で、「沖ノ島(宗像大社境内地)を中心とした宗像地域を複合世界遺産に登録しよう」と、七月一日から開催された「沖ノ島物語『海の正倉院』沖ノ島大國宝展」(主催「沖ノ島大國宝展実行委員会」が、九月十五日大盛況の内に閉幕した。



オープニングのテープカット(7月1日)

期間中は福岡県知事、宗像市長をはじめ早稲田大学の吉村作治教授らも来館し、大國宝展を盛り上げ、地元宗像をはじめ福岡・北九州市の両一〇〇万都市を中心に多くの人々が足を運んだ。
九月十五日最終日にはついに来場者三万人を突破した。三万人目は宗像市原町の織戸(おと)ヤス子さん(六九歳)で、ヤス子さんには当大社神島宮司から、國宝展の図録、博多人形師が製作した特製の「翁面



今夏の境内は沖ノ島物語一色だった

などの記念品が贈られた。長男で公務員の信文さん(四三歳)と、信文さんの長男昌輝君(一〇歳)は宗像市立南郷小四年、次男潤君(八歳)は同小三年の四人で来館した。ヤス子さんは「宗像大社の近くで生まれ育ちましたが、神宝館に来るのは初めて。これほど素晴らしいものがたくさん出土した沖ノ島ならば、ぜひ世界遺産に登録してほしい」と笑顔で話していた。
開幕からの人出は、
七月十七日に五、〇〇〇人、
八月二日に一〇、〇〇〇人、
八月十七日に一五、〇〇〇人、
九月二日で目標の二〇、〇〇〇人、
最終日の九月十五日に三〇、〇〇〇人を突破し、開催期間の二ヶ月

半で延べ人数は三二、六三五人であった。主催者の吉武邦彦実行委員長は当初の目標は二万人であったが、お盆を過ぎてからも来館者は増え続け、最後の二日間では三千人を超える人出があり、皆様の関心の高さに驚いている。今後、宗像大社をはじめ宗像市や大島村、観光協会などと協議を重ね、沖ノ島世界遺産登録運動を盛り上げていきたいと話していた。

期間中館内でよくみた光景に、宗像在郷の人々がお盆で里帰りしてきた他郷で暮らす身内・知人に嬉しそうに「沖ノ島」を説明していたことがある。「沖ノ島が宗像の誇りとなりつつあると感じた。また、あるタクシー会社の社長さんにお会いしたところ「ドライバーがお客さんによく國宝展のことを訪ねられたため、うちで買ったチケット(地元企業に相当ご負担いただいた)を運転手に持たせ、乗車してくれた遠方のお客さんにお



2F 館内の様子



1F 館内の様子



正面入口



インフォメーション



来館された吉村作治 早稲田大学教授



30,000人目の織戸さん一家



麻生 渡 福岡県知事

配りしていること、この国宝展が宗像地域全体の活性化の一端を担ったことを実感した。
また市役所、各企業をはじめ各種団体には、率先して前売り券を販売していただき、ある会社では必ず観ていこうと、社員に配布したという話も伺った。
そして何よりも市内各小・中学校からの関心が高まり、学芸員では手がまわらない程の多くの教師・

未来を担う子供達の来館を見たことは、関わった者の一人として特に印象的であった。
今後「沖ノ島を中心とした宗像地域が、我が国の「世界遺産候補地リスト」に挙がるには、日本国内の認知度、観光化との問題、女人禁制など宗像地域の掟等、難題が山積みでまだまだ時間が必要であるが、神郡宗像の沖ノ島物語はこの夏以降もまだまだ続く。

神宝館のご案内

宗像大社神宝館では、十月一日より常設展を開催致しました。

今回は展示を一新させています。従来通り、沖ノ島の御神宝を展示の主体としておりますが、展示の構成において転換をはかりました。フロア一別分野毎の「断片的展示」から歴史の流れに沿ってあらゆる分野のものを関連づけて紹介する「通史的展示」への転換です。

宗像大社の歴史の担い手は宗像大神とその祭祀者である宗像(胸肩)一族です。宗像一族は海を生活の舞台とする人々、海人族を祖とし航海術に長けた人々でした。四世紀後半から十世紀初頭にかけて沖ノ島でおこなわれた大和政権による国家祭祀の時期には、大和政権との密接な関係のもとに地方の有力首長としての地位を確立し、沖



「色定法師坐像」

また、今回は興聖寺所蔵の、一筆一切経の写経を成し遂げた色定法師の坐像と、宗像市教育委員会所蔵の古代胸肩一族の活動を示す同市内出土品(弥生時代ほか)をお借りして展示しております。併せて是非ご覧下さい。皆様のご来館をお待ち申し上げます。

ノ島での国家祭祀に深く関わりました。沖ノ島の国家祭祀の終焉後も引き続き中央政権との結び付きを持ちながら、宗像大神を祀る神主として、また在地の首長として祭政一致を行いました。さらに彼らは早くから航海術を活かして私的な海外交渉も行い特異的な文化を築きました。鎌倉時代になると一族は武家化し、宗像大宮司家として宗像における有力な支配者に成長してゆきます。戦国時代に嫡流が途絶え一族は断絶しますが、江戸時代も福岡藩の崇敬、保護を受けながら宗像神への信仰や祭祀は連続と続いたのです。現在、当社にはこの長い歴史に関わる数多くの文物が存在します。沖ノ島の御神宝をはじめ、文書、美術工芸品などです。これらを時代別にテーマを持たせて展示し宗像大社の歴史の変遷をご紹介します。

〈各テーマと主な展示品〉

- 1 宗像三女神の誕生
 - 2 宗像氏の海外交渉
 - 阿弥陀經石
 - 色定法師一筆一切経
 - 色定法師坐像
 - 3 宗像海人族の誕生と国家祭祀
 - 沖ノ島祭祀遺跡出土品
 - 雙鳳鏡
 - 金銅製龍頭
 - 宗像市内出土品
 - ・銅矛、銅戈、朝町竹重遺跡
 - 4 中世の宗像社
 - ・足利尊氏奉納品
 - 藍鞆、威肩、白朧丸兜付
 - 5 近世の田島宮
 - ・福岡藩主黒田家奉納品
 - ・三十六歌仙扁額
 - 6 辺津宮本殿・拝殿の造営記録
 - 辺津宮本殿置札
- ※◎は国宝、○は重要文化財、●は県指定文化財をさす。借用品については来館一月中旬まで展覧予定。



「金銅製龍頭」

決断力
その時昭和の経営者達は
瀧口凡夫

**世界に先鞭
大型タンカー**

池田内閣が一九六〇年(昭和三五)年に掲げた国民所得倍増計画は、高度経済成長の始まりであった。日本経済はこれから九一年のバブル崩壊まで、第二次石油危機に伴う世界同時不況などをはさみながらも拡大への道をたどる。高度成長期の入り口のところ、タイミングよく徳山製油所を持った出光も、さらなる展開を目指すことになる。

エジプトがスエズ運河の国有化を宣言したのは、五六年七月であった。十一月には運河が閉鎖された。スエズ運河を通るとアフリカ大陸の南端を回るとでは、運賃コストがまったく違う。これを契

出光興産株式会社

出光佐三
店主 其の13

業界の雄への飛躍
②



世界一の「出光丸」の見学に全国から中学生15,000人を招待したのも佐三の発案であった。

機に、世界的にタンカーの大型化が始まった。

出光の反応は素早かった。十月には米国のガルフ石油と契約、同

社がNBC(ナショナル・バルク・キャリアーズ) 呉造船部(現石川島播磨重工業) IHI 呉第一工場)で一〇万吨タンカー二隻を建造し、出光がこれを借り受けることにした。同時に、建設中の徳山製油所の荷役施設などの大型化に着手した。

NBC 呉造船部には、播磨造船所(現IHI)から真藤恒氏(のち旧日本電信電話公社 現NTT 総裁)が技師長として出向していた。まもなく本社に戻ったが、追いかけるように佐三から、自社船として十六万吨タンカー建造の打診を受けている。

この船は徳山港などの水深、マラッカ海峡の安全性などを考慮し、最終的には十三万吨級に落ち着いた。六二年十月、佐保重工で竣工し、由緒ある出光のタンカー「日章丸(三世)」の名を継いだ。当時、造船業界の常識をはるかに超える世界最大であった。

日章丸が就航してからだ、米国の石油会社の副社長が来日したとき、佐三に「あの船は折れないだろうか」と聞いた。あまり大きい船は背骨が折れる、と米国でも言われていた。

佐三は「技術者が折れんという

から、それでいいじゃないか」と答えた。日章丸は、造船王国日本の技術の勝利でもあった。

出光はこのあと、製油所は千葉(六三年)、兵庫(七〇年)、北海道(七三年)、愛知(七五年)を建設、八〇年には沖縄石油精製(株)を全額出資でガルフ石油から引き継いだ。

千葉は当時、東洋一の規模(六三年一月、日量一〇万バレル)を誇ったが、のちに述べる石油業法に基づく生産調整のため、能力の半分しか操業を認められなかった。六七年には第二期工事で増設、世界初の重油直接脱硫装置も導入した。首都圏を控えた出光の基幹製油所である。

タンカーも六六年十二月、世界初の二〇万吨級「出光丸」が就航、続いて松寿丸(六九年)、沖ノ嶋丸(七〇年)などを建造した。出光丸が横浜の石川島播磨で竣工したとき、佐三は全国から中学生一万五千人を招待した。そして全員に、自分で書いた小冊子「中学生諸君へ、こんな大きな船は日本人だけが造れる」を配った。

出光も高度成長期であった。このころの社史には「世界」「世界初」などの文字が躍っている。

第五回宗像おどつてん祭



九月二十三日、今年で五回目を迎える「宗像おどつてん祭」が行われ、秋晴れの一日神郡宗像は熱気に包まれた。
今年のおどつてん祭は第七回目を迎えた「九州大道芸まつりイン宗像」に日程を併せて開催。旧唐津街道の賑わい、宗像市は赤間宿を取り戻そうと始められた両イベ

ントは、前回まで「釣川さくらつつみ公園」「宗像ユリックス」などで開催していたが、地元からの神郡宗像の総氏神「宗像大社」に奉納すべきとの強い要望や、参加者らの広い会場で思いつき踊りたいなどの要望から、今回からスタート、審査会場を当社で開催することになった。

当日は県内を中心に、遠くは長崎県佐世保市、山口県下関市などから全二十七チームが集まり、まず当社御神苑で神職から一組一組「お祓い」を受けた後、奉納踊りを行った。その後、順次宗像市の赤間宿場跡跡の三会場に繰り出した。

午後二時までは各チーム当社に戻り、特設ステージが設けられた第一駐車場で「フアイナルバトル」が開始された。原田宗像市長、山田福岡県議、吉武玄海観光協会会長、原田玄海ホテル旅館組合会長、当大社神島宮司ら審査員が見守る中、現在全国各地で拡がりをみせている「よさこい踊り(高知市)」や創作ダンスなど、各チーム元一杯の踊りを披露した。

表彰式後は、主催者が即興で考えた振り付けの踊りを、参加者全員が一体となって踊り、来年の再会を誓いあった。

各賞受賞者は次の通り。
○感動大賞

長州青組(山口県山口市)

○おどつてん大賞

宮田光陵中学校(鞍手郡宮田町)

○チームワーク賞

新堀組粕屋郡粕屋町

筑前かさや一番隊粕屋郡粕屋町

○ハッスル賞

青嵐(長崎県佐世保市)

○アイデア賞

琉球国祭り太鼓(福岡市)

○ユーモア賞

むなかたリズムミックパワー(宗像市)

秋の交通安全週間 街頭キャンペーン

津屋崎町で開催

秋の交通安全週間(九月二十一日～三十日)に伴い、宗像警察署管内でも九月二十二日午後三時から、宗像郡津屋崎町の四九五号線沿いで、秋の交通安全週間・街頭キャンペーンが行われ、宗像警察署・宗像地区交通安全協会・宗像地域交通安全推進委員会を中心に、当社からも神職と巫女が出向した。今までの通例では、宗像市三郎丸の旧三号線沿いであったが、この信号の少ない四九五号線での交通事故が近年増加傾向のため、今回初めて津屋崎町での実施になった。

当日は宗像交通安全協会会長の小山達生県議会議員、田代勝宗像警察署長らも参加し、総勢二〇人程で行い、今回は「鮭入りのおにぎり」を二〇個(一一〇番)準備し、「交通事故をサケよう」「街頭犯罪をサケよう」「飲酒運転をサケよう」と、道行くドライバーに配り、安全運転・交通マナーアッ

プを呼びかけた。

当社から出向した巫女も、交通安全を訴えて交通安全の「ステッカー御守」を配布すると、一般道では緋袴姿がよく映えドライバーも笑顔で応えていた。

今年の宗像警察署管轄では昨年と比べて、人身事故・死亡事故・街頭犯罪も少ないようである。このキャンペーンが交通事故、街頭犯罪の防止・解消に少しでも役立つことを切に願う。



(続)

浜の寄物

180

いしい ただし



ニュージージーランドの話は、武田さんのルーツさがし一話を残して終わりにしたい。

そのルーツの主は、長崎県・五島列島宇久島の月川喜代平主之で、もう少し資料を集めて書きたい。

今年の漂着物学会は十一月八日(土)と九日(日)、三重県・鳥羽市の海の博物館で開催する。八日は一時より東京水産大学の兼広春之先生の基調講演「日本の沿岸域のごみ汚染」からはじまる。先生は一〇年以上にわたって東京湾の海底や離島のごみ調査を手がけられた。またレジンペレット汚染の豊富なデータも蓄積されており、最新ごみ汚染の情報が聞かれよう。

発表は六本あり「伊良湖岬に打ち上げられた卵たち(田中利男)」「エイ卵殻の名前(中司光子)」。漂着物研究をクラブ活動としている京都・東山高校の地学部は、昨年につづき今年も発表する。「廃棄量および形態による漂着様式の違い」。「矢作川の漂着物観察(嶋村博三)

島県江田島・倉橋島海岸における発泡スチロール破片の漂着散乱の実態(佐々木和也・藤枝繁)「使用済み廃フロートからフロートの再生」(石川正敏)。九日は海の博物館の見学をする。膨大な収集品の見学と解説、ここに収蔵されているものを見ておけば、特に漁具類の分からないところも解くことができよう。

いま名古屋で「漂着物考」と題して、漂着物の展示が九月からはじまっている。名古屋、大阪、東京と巡回する。企画はINAXで、名古屋INAXギャラリーは九月四日から十一月二日まで、東京展のギャラリーが十二月一日から二〇〇四年二月二日まで、大阪展が二〇〇四年三月五日から五月十一日までである。INAX出版部からは「漂着物考」の図録も出版さ



著者の書斎

れている。

第一九回国民文化祭(とびうめ国文祭)は福岡県が開催県である。期日は二〇〇四年十月三十日(土)から十一月十四日(日)まで、各市町村それぞれテーマを決めて参加する。宗像市は社交ダンス、児童演劇、大道芸が、福岡町は演芸津屋崎町が津屋崎町の文化が予定されている。古賀市は漂着物を中心に、海をテーマに展示やイベントを行うことにしている。

郷司正巳氏の「ベトナム 海の民(新泉社)はベトナムの竹籠舟(竹籠舟には円形とザル形の二種がある)円形のものは一才法師



宗像郡津屋崎町勝浦浜の大量のポリタンク容器

の舟と郷司氏が言っているように、人間一人がのれる二メートルほどのもの。その舟とベトナムの漁民の生活が豊富な写真にまとめられている。写真が素晴らしい。古賀の資料館に置いている志賀島・勝馬の竹籠舟はザル形のものだが、その事についても触れられている。この本を読んだ民俗学者の谷川健一先生から電話があり、竹籠舟らしい記載は古事記に、天間勝間、書記には無目籠がそれであろうと話されていた。また地名学者の吉田東湖も、勝間の地名は竹籠舟と関係がありそうだと書いているというのを教えていただいた。

志賀島の勝馬に漂着した竹籠舟は、全く偶然であろうし、地名とは関係はないが、不思議な縁を感じた。一〇月はじめ夜、津屋崎に用があつて行った。浜を歩いたら、もう海岸歩きの人に三人ほど会った。イカ拾いは、すではじまっている。毎年冬に大量漂着するポリタンク容器の流出もがはつきりした。韓国ノリ養殖業者が網に付着する海藻を除去するためポリタンクに入つた薬剤で、空になつた容器は野積され海岸に放置。強風に吹かれて流出(毎日新聞六月二八日付)。それにしても五万数千個とは恐れ入る。



神郡宗像

末社めぐり

このみどころぬし

三十三許斐所主神社(心吉神社)

宗像大社より南南東に約七キロ、国道三号線沿いにそびえる「宗像四塚」の一峰、許斐山を臨む宗像市王丸字大谷に鎮座跡地がある。

御祭神は、住吉三神(中筒男命・上筒男命・底筒男命)、由緒は不詳とされていて、許斐権現の眷屬小神である。



許斐所主神社 跡地

御縁起の百八社のひとつに「許斐所主」と、正平年中行事神事の條にも表われている。「筑前國續風土記附録」には、「別所谷にあり。祭る所住吉三神なり。十一戸の産靈なり。社内に観音堂あり。」とあり、同拾遺十八には、王丸村杖郷別所の産神である心吉社につ



いて、「宗像末社記に許斐所主神社有。所主を誤りて心吉と奉稱成べし。又上津七郎殿といへるも、同社のことにや。」、また明細帳には、王丸字大谷に坐す心吉神社(舊無格社)をこれとしている。境内社は古宮神社(大名持命・田心姫命・誓田皇子)一社あったとされ、寛永二年(一六二五)創立、本村より移転とある。木々の間から許斐山を望む、ミカン畑と杉林となつている原野に「心吉宮」の跡地がある。現在は雑木の中に鳥居が隠れており、扁額には「心吉宮」の文字がかすかに残っていたが、鳥居の前には橋がかかっていない小川が流れており近づくこともできない。昔は石段等もあつたと聞くが、今は雑木に埋もれており、確認もできなかった。神殿拝殿造続二間三間という記述が残っているが、今はない。

木工教室



夏休みも終盤。去る、八月三十日鎮守の森、当社境内に於いて「家族木工教室」が開催された。この教室は、当大社宮大工で第二宮、第三宮を始め儀式殿等当社木造建築物の修・造営に携わった株式会社弘江組の職人の方に御奉仕いただいた。

鉄骨と鉄筋コンクリート一辺倒の建物が多くなり、日本の風土とそこから生まれた「木の文化」が忘れ去られつつある現代に今一度、次世代の子供達に木ならではの手触り、質感というものを体で感じてもらい、お金で物が手にはいる時代に「造る」というかけがえのない楽しさを味わってもらおうと、教化活動の一環として開催された。当日、宗像市郡内はもとより



福岡市からの参加者もあり、親子六十四名、二十四組の家族が参加のもと午前九時、弘江組花田社長より作業内容の説明が行われ、早速作業に入った。子供達は、慣れない手つきで鉋をかけたたり、鋸で木を切断したりと悪戦苦闘しながらもプロの手ほどきを受けながら午後四時には多機能ラックを作り終えた。引き続き丸太早切り競争が行われ、子供達も何か「コツ」を掴んだよう朝に比べると随分と慣れた手つきで木を切る姿に大変驚かされた。午後五時には全ての日程を終了。子供達は自分の作品と夏休みの思い出(夏休みの宿題自由工作?)を両手に抱え家路についた。

第五〇七回 宗像大社歌会詠草

大野展男選 毎月25日メット



大島 杉田 禮子

花束を抱きて帰りし退任の夫に労りの言葉かけえず

(評) 主人公は元大島村長、夫の仕事のむつかしさを熟知する故に、言葉にはならないその時の作者の心情、深い愛情のこもった一首である。

池田 森 龍子

捜すこと諦めるたるその夕べ立待月が眼鏡ひからす

(評) 身辺はブラックホールばかりではないかと思う程物が姿を消す加齢の嘆き、立待月は十七夜月で七時頃が月の出である。月に呼応することく光った眼鏡、日常生活にかかすことの出来ないものを見つけた喜びが、詩的に美しく詠いあげられている。

光岡 河村 久光

コーヒーと緑茶を飲んで眠れざり目をしばたき本読まんとす

(評) カフェインのせいかコーヒーを飲むと眠れないと言う人が多い、作者もその一人であろう、飲むことを押していたが、ついその禁を破った。その夜の心と身体の葛藤を「目をしばたき」とユーモラスに詠っている。

東郷 山口 節子

天の川も北斗の星もかけ淡く南東の空に火星きらめく

(評) 六万年ぶりに大接近したと言う火星、星に興味のある人も無い人も空を仰いだことだろう。私が見たのは九月十六日で最接近の夜より大分あつたが筑後川の上空に充分明るかった。作者が見たのは私より早い時「天の川も北斗の星もかけ淡く」に月にも劣らなかつた火星のかがやきを仰ぎ見た驚きとよろこびが充分に出ている印象深い一首である。

日ノ里 大和美由紀

鳴きながら鴨は連れ立ち薄紅葉せし山中の湖を泳げり

(評) うす紅葉した山中の湖に初飛来した鴨たちを詠って一幅の日本画のようである。巧みな作品。

大井 木原ふさ子

沖あひの青き小島は小呂ならむ秋めく海の平らに見放く

吉留 高山 信子

物を干すわが足許に玉すだれ咲くを見付けし今日よろこび

日ノ里 石松 弘次

ふる里は離重ねてなつかしも喧嘩友達いまはあらく

日ノ里 石松 知子

丈なくて垣にしだる紅の萩風吹くまに花の波打つ

光岡 森田富佐子

十五夜を明日にむかえど皮肉にも天候不順とラジオは告ぐる

光岡 森田 房子

部屋の友人りくる風を脊にうけて眠り続ける真昼しづけし

田野 森 甲子

わが病むもやさしく父の世話をする息子夫婦と知ればうれしき

田野 森つるの

仏送りに小さき提灯点し行く孫の二人は着物姿に

牟田尻 横山 雪子

携帯電話のメールの末尾に溜息をひとつ吐きたり明るき友が

池田 小田 イセ

蝉声もいつか途絶えて閑散と風ふき渡る秋の夕暮

選者詠

みあれ祭

夕羽振り白波はしる玄界の灘は日癖の風いでてきて

集まれる漁船の波の騒立ちて潮の香強し島の港は

御座船を待ちとどまる港外は青北の波船首を襲ふ

騒立てる波の遠くを走りゆく「波切り御幣」をかかげし船が

掲げたる大漁旗 波間に出没すけふ供奉するは三百余隻

宗像大社 歌会 俳句作品集(四八二)

日ノ里 花田いつ枝

爽やかや競技に廻す車椅子

光岡 井上 嘉治

獣道鬼百合一輪夏招く

東郷 宗風社俳句会

吉武 湧泉

颯爽と北鮮美女団沸く日永

吉田 杏子

娘の電話声さわやかに秋となる

三浦美千代

土用波磯の祠の見えかくれ

田中 雨葉

水含むみ水さお樟干しあり鱗雲

木原 房子

釣人の影なき波止や土用波

編集後記

奉職五年目にあれ祭に御奉仕させていただきました。約四〇〇隻の大船団を導く先導船の先で大串を捧持し、海道を破へ清める所役です。神事の流れも状況もかつてはいましたが、「百聞は一見に如かず」。出港時には感激で、山国育ちの小生胸がいつぱいになりました。今月号から紙面が一新しました。ただ情報を伝えるだけでなく氏子・崇敬者の皆様に愛される紙面づくりを目指して参る所存でございます。今後共、何卒よろしくお願い申し上げます。
(M・O)

宗像大社社務所 発行所

〒811-3505 福岡県宗像市田島
電話 0940-62-1311(代)
発行人 伊藤佳和
編集人 大塚宗延
制作 ジーエータップ

定価1年送料共1,000円